

2024. 1. 7. 主日礼拝説教
聖書： マタイによる福音書 8章 5～13節
『言葉のみで充分である』

「百人隊長の僕をいやす」という小標題が掲げられます。もともとこの記事はQ資料に属するもので、マタイとルカ(7;1-10)でほぼ内容が一致していることから分かります。物語は癒しに至る状況設定(5-7)とイエスと百人隊長のやりとり(8-12)、癒しの実現(13)という構成です。相変わらずマタイの状況説明はルカに比べて簡潔で短いのですが、おそらくQ資料自体の状況描写も似たようなものだったかと考えられます。

物語はまず百人隊長が登場します。百人隊というのはローマ帝国の軍隊編成ですが、当時は地中海世界全般に広がっていた編成で、各国とも独自の改良を加えて用いられていたようです。ここで登場するのはローマの正規兵というよりも、おそらくヘロデ・アンティパスの外人傭兵部隊長であった可能性が高いと考えられます。ローマ正規兵に比べて締まりがゆるやかなため、こうしてイエスに頼み事を持ち込めたのでしょう。

異邦人の病人が、しかもイエスに直接会うこともないのに、彼の言葉によって癒されるという記事は 15;21-28 の「カナンの女の信仰」にもあります。これと対比しながら本日の物語を読むと、7節の「わたしが行って、いやしてあげよう」というイエスの言葉は疑問文「わたしが行って、いやすのか」と訳した方が正しいと考えます。こう訳すと、イエスが百人隊長の要請をひとまず断ったことになります。これは 15;24 でカナンの女の要請をイエスが断ったことに対応します。そうすると8節の百人隊長の謙虚さが物語の中でより強調されて印象づけられます。これは 15章でカナンの女の謙遜がイエスの拒否の後に強調されたことに通じます。このようにギリシヤ語写本には疑問符がないので新共同訳のように平叙文に翻訳すると異邦人に対するイエスの積極的姿勢が浮き彫りにされます。どちらにしても当時の初代教会が異邦人を宣教対象にシフトして行ったことが分かります。

この記事の中核とは、イエスが直接行かなくとも言葉のみで救われるということなのです。これは、イエスの死後、彼に直接会えなくなった初代教会の時代に重要な意味を提案するのです。つまり、人はイエスの直接的な「業」ではなく、間接的な「言葉」においてのみ救われるという宣教の「言葉」への権威と力の譲り渡しなのです。

「癒し」というこの世を象徴する即物的な具体性の物語を媒介にしながら、形のない「言葉」への重心移動が述べられてゆくのです。異邦人の方がその委譲理解が速やかだったのでしょうか。

わたしたちは信仰に御利益的な力を期待してはいないでしょうか。または道徳的な感化を期待してはいないでしょうか。さらに人生の高みを望む目的だと期待してはいないでしょうか。

しかし、それらは信仰に対する誤解なのです。信仰は一見、それらの期待に応えているようで、実は御利益的には無関心であり、道徳的には挫折であり、人生の高みを望むには幻滅でしかないのです。この世の価値観からすれば、信仰ははなはだしく期待はずれなものなのです。信仰とはこの世の期待を徹底して裏切るのです。というよりは、期待を裏切りながらもっと違った期待を持たねばならないことが明らかにされてゆくものなのでしょう。信仰者とは、この異なる期待を抱かされた人のことなのです。